

学校と家庭を円滑につなげるために！

各市町村では、小学校入学時に就学時健康診断を実施していますが、子供も親も小学校入学を控え、喜び半分、不安半分といったところではないでしょうか。そんな不安を少しでも和らげるために、多くの市町村では就学時健康診断の時間を使って、保護者対象の家庭教育学級を行っています。那珂市では、阿部智仁社会教育主事が、家庭教育に関する情報等も紹介しながら、学校と家庭を円滑につなげ、子供たちの健やかな成長につながる講話を行い、大変好評を得ました。この就学前の取組が、様々な市町村で広がりつつある「訪問型家庭教育支援」の相談活動につながることで期待しています。

現在、管内では訪問型家庭教育支援活動として、「水戸市・小美玉市・常陸大宮市・ひたちなか市(※既存の活動を活用)」の4市が取り組んでいます。方法は様々ですが、小学校入学時の心配事や子育ての悩みについて相談できる窓口があるというのは、保護者にとって心強いことと思います。

水戸教育事務所としまして、子育て家庭や子供たちを、学校だけではない、「社会総がかり」での支援の輪が広がるよう推進してまいります。

阿部社会教育主事と家庭教育学級



春夏冬話(あきない話)

生活様式の変化を実感する

昭和の時代、「12月31日の恒例行事は？」と聞かれたら、日本レコード大賞の番組を見た後で、紅白歌合戦を見ることだった気がします。そして、「行く年くる年」が放送される中、家族で神社に元朝参りに出かける人も多かったと思います。そのころ、テレビは一家に1台しかなく、茶の間でちゃぶ台やこたつを囲んで家族全員でテレビを見ていました。『チャンネル争い』も起こっていました。

チャンネル争いとは、同一世帯内におけるテレビのチャンネルを巡る争いのことである。家庭にテレビが一つしかなかった昭和期においてよくみられたが、現代においては一人に一つずつテレビがある家庭、あるいはパソコンやスマートフォン・タブレットを使用してテレビを視聴することも多く、チャンネル争いが発生することも昭和期に比べれば少なくなった。

私がまだ独身だったころ、一回り(12歳)年の離れた先輩は次のように言っていました。「うちは、敢えて2台目のテレビは買わない。1台しかないから、テレビを見たい子供たちはテレビの前のこたつに集まってくる。そうすれば、チャンネル争いも起こるが、家族のコミュニケーションもとれるからね。(昭和の終わりから平成の初め頃)」

紅白歌合戦の視聴率は、80%を超えることもあったそうですが、1986年以降は60%を割り込み、2004年以降は40%を前後しました。そして、2023年は31.9%でワーストを更新したという記事を目にしました。

若年層のテレビ視聴時間が減っている理由として真っ先に挙げられるのが、SNSの普及です。2021年にZ世代に対して行われた調査では「普段チェックする情報源」としてSNS(YouTube等動画共有サイトを含む)を選択した人が79.8%、テレビ番組/テレビCMを選択した人が65.0%でした。

近年、テレビの視聴時間は減少傾向にあり、若年層だけでなく中年層においてもテレビを見なくなっている人は多いです。広告費の推移からも、その状況が読み取れます。テレビ離れの主な原因としては、ほかのインドア系娯楽が増えたことや、動画配信サービスの普及などが大きいです。

昨年の暮れには、「コタツのない家」というドラマが放映されるなど、生活様式の変化は、家族団らんの変化にも大きく影響しています。

あなたの家では、家族がこたつを囲んでみかんを食べたでしょうか？(by O・M)

